

くまもと・わくわく基金（市民公益活動支援基金）
平成29年度助成事業公開プレゼンテーション議事録（要旨）

- 1 開催日時：平成29年2月16日（木） 9時30分～
- 2 開催場所：桜の馬場城彩苑 観光交流施設 多目的交流施設（総合観光案内所2階）
- 3 市民公益活動支援基金運営委員
 - ・出席者： 古賀 倫嗣 委員長（熊本大学教育学部教授）
 - 佐藤 和弘 副委員長（株式会社 地域総研 代表取締役）
 - 越地 真一郎 委員（地域づくりアドバイザー）
 - 中島 久美子 委員（特定非営利活動法人 熊本県子ども劇場連絡会 理事長）
 - 松枝 清美 委員（公募市民）
 - 井上 学 委員（市民局次長）
 - 田上 聖子 委員（観光文化交流局次長）
- 4 配布資料
 - 資料1 平成29年度助成事業公開プレゼンテーション（次第）
 - 資料2 平成29年度くまもと・わくわく基金助成申請団体一覧
- 5 プレゼンテーション（団体発表5分、質疑応答5分の計10分）

(UP-1) うえき自然塾

【事業名】里山での親子自然体験活動

<質疑応答>

- ・(越地委員長) 1年間を通して四季折々の活動をなさって、もう10年近くなるということで大変敬服している。当基金は市全体の公益的な活動を対象とすることが大きな名目のひとつだが、これまでの10年間を通して、貴団体でやってこられたことを他の地区にも広げていこうとするなら、どういったビジョンを考えられるか。その場合、この体験を通して何が一番大事なことなのか。

(団体) 現在、市内の各地区の小学校から「訪問したい」、「こんなことをやってみたいので見学したい」と要請があっており、そういうところはこちらから出向いている。実は、明日も学校に行き行って飯ごう炊飯をする。そういったことから交流を深め、これを広げていけたらいいなと思っている。

それから、当団体でできることと、よそでできることは少し違うところもあると思うので、そういったところも含めながら進めていきたい。

- ・(井上委員) 当基金に団体登録された平成24年当時に平成23年の実績をいただいているが、ここ数年もいまプレゼンしたような活動を毎年やっているのか。

(団体) 1月を除き毎月1回を原則として、毎年やっている。

- ・(井上委員) 役員の高齢化が気になるところだが、地域を対象に活動する団体の方々などとの連携によって若い方を育成することについて、どのように考えているか。

(団体) 最近ひとり若い方が加入されたが、今度の地震でその方も忙しくなり、なかなか来れていない状況。定年退職された方たちが主にボランティアとして活動しており、私たちもその地域の方に来ていただきたいと思いつながら、ボランティアの中にはなかなか参加できないので、活動のときに大いに参加していただいている。

- ・(越地委員) 自然塾をやっている場所は、所有者などどういった土地なのか。

(団体) 土地の半分は同じボランティア仲間のもので、あと半分は地域の方から無償でお借りしている。

(越地委員) 場所がないとできない活動だが、よそに広げようとしたときは場所探しが必要になってくるといふわけか。

(団体) おっしゃるとおり、ボランティア仲間の土地が主なので、そこを中心にしながら広げていこうと考えている。

(UP-2) 川尻青年協議会

【事業名】 第10回 夏だ！夜市だ！川尻わっしょい2017

<質疑応答>

- ・(古賀委員長) 予算のことでお尋ねするが、今回の予算規模はこれまでの第9回までと同じくらいか。

(団体) 少しヒーローショーの部分がオーバーしている。

- ・(佐藤副委員長) 総事業費が286万ぐらいで、そのうち25万円を助成希望額としているが、その25万円は特にどういう費目で使おうと考えているのか。

(団体) 先程言ったヒーローショーに充てたい。

(佐藤副委員長) もう一つよろしいか。こういった祭りは非常に大事だと思うが、他の地区に広めようとしたときに、何かノウハウなり、何か参考になるものがあると非常に我々としても支援していきたいと思うが、そういった部分はいかがか。例えば、他の地区で同じことはできないのだろうが、そういったネットワークを持ってもらえるか。

(団体) もともと川尻協議会では、いろんなところにつながりを持っているので、各種団体や城南地区、特に南区はほとんど一緒に連携してやっていることもあるので、ノウハウはきちんと渡せる状況にあり

問題はないと思っている。

- ・(田上委員) 事業計画書の企業期間が4月から10月までとなっているが、実際にお祭りがあるのは8月である。この期間設定はどういうものか。また、11月以降の活動は特になのか。

(団体) 準備期間を含めている。4月から集まって、大体締めが10月くらいまでかかるのでこの期間としている。11月はメンバーが変わるので総会がある。それからまた熊本城マラソンなどのいろんなボランティア活動を自発的にやっている。

- ・(古賀委員長) 過去の開催で子供たちとお化け屋敷で関わったようだが、今回は小学生の子供たちとどんな関わりを考えているのか。

(団体) これからそれも踏まえて協議中としている。いまやっと子供たちが少しずつ前を向いてきたので、復興してこれから少しずつ自分で考えてきてくれると思うので。ただ年度が替わらないと学校編成もまた変わってしまい難しいので、4月からそういった話を一緒にしていこうかなと考えている。

(UP-3) NPO 法人 くまもとオカリナの会

【事業名】熊本地震復興支援「第2回 くまもとオカリナッセ」

<質疑応答>

- ・(中島委員) オカリナの癒される音で、地震以後に活動されているということで本当に素晴らしいと思う。経費のところでは質問だが、自己資金のところに参加費という形で2,000円×50人と入場料という形で2,500円×100人とあるが、この違いはどういったものか。

(団体) 参加費は、ステージ上でパフォーマンスをしてくださる方を募っており、そちらの方には、入場料とあわせて4,500円の参加費をいただいている。入場料は一般徴収の方の金額としている。

(中島委員) 4,500円の参加費を払う方がいらっしゃるということだが、大体の人数はどのくらいを予定されているのか。

(団体) 昨年の第1回目の開催では33団体の参加で、グループでの出演もあり、一番多いところで8名、少ないところで1人で出演される方もいる。毎年ちょっと違う形で実施したいと考えており、昨年は熊本市内からの参加者が少なかったけれど、33団体のうち有名な団体が全国から参加している。

- ・(佐藤副委員長) 事業収支のことでお尋ねしたい。52万円の収支のなかで報償費が20万円、国際交流会館のホールが22万円とある。万が一助成が受けられなかった場合はどのように考えているか。

(団体) 昨年からはじめて自分たちで実施したが、小さなホールでは照明も当たらず、音響も施設もあまりよくないところでやっていたので、国際交流会館という素晴らしいホールで、いろんな照明に当たり、皆さんにとってもストレスなく、お客様に良いものを提供したいということでそういった大きな金額になっ

ている。もしも助成していただけない場合は、そういうところも譲歩しながら、いろんな方のご意見をいただきながらやっていけたらと思っている。一応、いまのところ2名のゲストを予定しているが、そのところを少し、例えば1人にするなど検討したいと思っている。

- ・(越地委員) オカリナ普及のためにどんなことに力を入れて、またその経費をどのようにして賄っておられるのか。

(団体) 日頃いろんなところで活動しているが、もともと当団体は講師たちが中心で始めたもので、一般のオカリナをやっていない方からの応援もすごくある。経費としては、そちらの会員の方の経費を運営しながら、皆さんがお勤めの病院とか、そこから広がって家族がいらっしゃる施設だとか、そういったところで演奏をしている。また、私たちが演奏をして20年になるが、これまでにいろんなところでのお付き合いがあり、できるときに幼稚園や小学校とかで演奏をしたいと思っている。

(UP-4) NPO 法人 熊本高齢社会活性化研究センター

【事業名】 高齢者のための介護講座

<質疑応答>

- ・(古賀委員長) 失礼な質問で申し訳ないが、見方によっては、この事業は熊本機能病院の社会貢献ではないのかという捉え方もできるかと思うが、貴団体としての位置づけ、あるいは機能病院との役割分担についてご説明いただきたい。

(団体) この事業は当法人が主催するものであって、あくまでもスタッフとして機能病院の多様なスタッフに協力をいただき参加していただくもの。委員長のおっしゃるように機能病院の社会貢献の一環にもなるかと思うが、あくまでも主体は当法人が主体であり、機能病院以外の講師も適当な方がいらっしゃれば入っていただきたいと思っている。

- ・(佐藤副委員長) 昨年から継続しての取り組みに敬意を表している。前回18名参加されたということだが、それをもっと増やしていくため、工夫されようと思われていることや特にどういう点を努力したいとお考えか。

(団体) 多くの高齢者が受講されるので、公共交通機関が非常に大きな問題になる。そういう意味ではご存知のように熊本機能病院は交通に恵まれないところにあるもんだから、ぜひ受講したいけれども行くことができない、もっと中心部でやれないかというお話もあり、会場については今後少し考えたいと思っている。それから昨年各コースに感想を書いていただき、おおむね好評だったが、内容を整理していきたいと考えている。

- ・(越地委員) これこそ需要がたくさんあって、熊本市全域で展開して欲しい事業だと思っているが、経費が高い印象を受けた。会費を徴収してもやる価値があるのではと思うが、いまのところ受講料は参加者全員無料という前提か。

(団体) この助成をいただいていることから、大体は無料としている。ご承知のように、本来ならもっと広域に何回も開催することが非常に望ましいため、校区社協あるいはシルバー人材センターなどご相談して、もっと会場数を増やし、またそのためには、当然スタッフも必要になってくるため、会費を徴収するという方向性についても、今後具体的に発展させていこうと考えている。

- ・(田上委員) チラシはどういったところに配布されているのか。

(団体) 市の老人クラブ連合会や、さわやか長寿大学を受講されている方々、あるいはその OB の方々、シルバー人材センターを活用しておられる方々、それから市社協を通じて各校区の社協と、非常に広範囲に広報させていただいている。

(UP-5) NPO 法人 オリーブの家

【事業名】生活困窮者（刑余者等）の社会復帰のための啓発・広報活動

<質疑応答>

- ・(佐藤副委員長) ぜひ事業を発展していただきたいと思う。月刊オリーブを全国に発送するということがあったが、差し支えなければ具体的にどういったところに送られるのか。

(団体) 当法人を立ち上げるときに相談をして、全国ネットを持っておられる基督教の指導者の方がおられ、国内 30 箇所や海外にネットを使って PDF で発信している。そのようなルートが多くあって、そこに関わった人、または違うかたちで出会った方たちに送っている。

- ・(越地委員) もしお持ちであれば、どんな冊子なのか一度見せていただくと非常にわかりやすいと思うが、今日はお持ちでないということ。

(団体) 持ってきていない。

(越地委員) 全国展開をなさっているなかで、特に熊本でこういった形で普及、啓発に力を入れたい、またそのために熊本では特別にこんなことをやっているということはあるか。それとも、熊本は全国での活動の一つであるという存在なのか。

(団体) 熊本刑務所は、特に重い刑務所であり、理事長が最後に出たのが 15 年の刑で、熊本刑務所だった。彼はもう故郷には戻らず、熊本で骨を埋めて、この地で活動をしていきたいとしたのが始まりだった。この前の熊本地震があったが、そのときも被災したので、施設と私どもも一緒に十数人で避難生活を一ヶ月して、それに対しても全国から支援が来て、その報告も随時していった。この熊本の地から復興とともに私どもも発展していけたらと思っている。

(越地委員) 例えば、熊本で重点的に冊子を配布して周知しているなど、特に地元で力を入れていると

いったことはあるのか。

(団体) もちろん地元にも発行している拠点がある。熊本で特化してというか、当法人が立ち上がってからすぐに保護観察所に問い合わせがあって、オリーブの家周辺で、まず足元からの理解を得るために、地域住民に対して説明会が行われた。そのあと私どもも自治会に入り、周辺清掃を自主的に始めて、いまは地域の方々に感謝されたり、子供たちも挨拶をしてくれたり、そういうニーズが広まっており、そういった方たちに配るというわけではないが、地道な活動になるが、関心を持ってきてくださる方などに対して届けさせてもらっている。

- ・(古賀委員長) きわめて個人情報に掛かる部分なので、公表できない部分もたくさんあると思うが、この事業が上手くいったか、いかなかったか、つまり達成目標の評価としては、この事業が採択された場合にどのような形でこの事業が上手くいったと考えるのか。そのものさしについて何かお考えだろうか。

(団体) 月刊誌の最後のページにファミリーの声という欄があり、そこにうちに来た方々のコメントがある。その中には、ひらがなしか書けない方もいて、彼はそのままと精神病院に入ってしまう形だったが、細かいフォローによっていまはアパートに暮らしていて、いつも日曜日には私どものところに来ている。そしてある一人の方は、もっと早くこのようなところに出会っていればよかったと言っていた。その方は10回も再犯を犯して刑務所に入った方だったが、うちに来て自分のこと、体のこと、将来のことをゆっくり考えることができたとおっしゃっていて、いま彼は半年の刑を終えて、グループホームに入って、就労支援事業に行きながら日曜日は私どもの施設にきている。そのようにオリーブの家を実家のようなだと思っている方が何人もおられる。うちに来た方で、再犯をした方は、残念ながら4名おられる。そのうち2人の方に対しては身元引受人になってほしいという要望を本人からいただいた。今度3月には一人の青年で出てくるので受け入れる予定でいる。そのように再犯をしない受け皿として、こういった場所はとても大事であり、就労に対しても支援をする場所として、親身になって、そういった形でオリーブの家の存在は、当事者にとって大事な場所だと思い頑張っている。

(UP-6) NPO 法人 ディスカバリーくまもとボランティアの会

【事業名】次世代観光人材育成出前講座（英語でボランティアガイド養成講座）

<質疑応答>

- ・(井上委員) 非常にタイムリーな事業だと思うが、今回育成した子供たちが、熊本に残って、そういったボランティア活動に定着していくための仕掛けみたいなものは何かお考えだろうか。

(団体) 特に高校生、大学生はボランティア活動に直接参加できるように支援していく。ひとつの例として、この活動に参加したスキルによってグローバルに成長して、アメリカの結構知られている大学に4つ通って活躍しようとしている。子供たちが例え熊本に帰ってこなかったとしても、その子達の心の中には、小学校のときに覚えた、自分たちの町をきちんと英語で話せるということが鮮明な記憶となって残っていくと確信しているし、実際そうになっている。熊本に帰ってきて一緒に活動してくれるのが一番ではあるが、やっぱり出て行っても故郷のことを忘れず、しかも故郷を発信できるように歴史をきち

んと学ばせるので、そういったところかと。

(井上委員) 失礼ながら、役員もかなり高齢化してきているのではないかと。

(団体) 10年やっているのですが、役員は結構長くやっているが、若いママさんたちが参加してくれているので、会員自体はどんどん若返っている。それとやはり東京オリンピックや、熊本で2019年に開催されるワールドカップなど、そこで活躍したい、英語を活用したいと、埋もれた人材が自分たちの英語を活用できるんじゃないのかと出てきている。つい昨年秋に11名の講座が終わったが、そのときに若い女性たちがたくさん入ってきてくれて、その若い女性たちを全部リクルートしたので、メンバーは活性化している。

・(佐藤副委員長) 水前寺成趣園にコンシェルジュデスクができたきっかけはどういったものか。

(団体) これは心痛めることなのだが、熊本城が被災して、海外からのキャンセルが一斉に来て、それだけでなく熊本への観光客が減ってしまった。そのときに八代港などに着く韓国、台湾、中国の大規模な団体の方たちが水前寺に見えるようになった。そこで水前寺でも案内はしていたが、常駐して欲しいかと出水神社の方からお誘いを受け、ちょうど私たちも拠点となる場所を模索していたので、最初はガイドとして常駐して欲しいというお話だったが、こちらのアイデアでコンシェルジュデスクをオープンし、園内だけでなく地域の活性化にもつながるような活動にしようとした。

(UP-7) NPO 法人 熊本教育振興会

【事業名】第21回 新しい風を呼ぶ教育講演会

<質疑応答>

・(古賀委員長) 今回が21回目ということだが、今回の事業だけ見てみると、ルーテル学院への内向きの事業という印象を受けるわけだが、この事業が、熊本市民だとか周囲に広がっていくというような、対象者の広がりについてはどのようなお考えか。

(団体) この度の対象者はルーテル学院の中学、高校、大学、それからPTA会と、一般社会人、それから当会の会員の皆さんにご案内をしていく。どこまで力が及ぶがわからないが、そういった全体に門戸を開いているという形を取っている。

(古賀委員長) この基金の性格上、一番初めに一般市民が出てくるべきかと思い申し上げたことだった。そういうことであれば、この質問に関してはこれで結構です。

・(佐藤副委員長) 今度の大庭先生も立派な方で、個人的に存じ上げているが、資質の問題ではなく、招聘される講師の選考基準というか、どういう形で先生方を選考しているのか。それがあれば教えていただきたい。

(団体) 選考は毎日一回役員会を開いており、そのときに役員十数名で講師の先生を決定している。その中で私たちがいつも思っているのは、将来を担うのは子供たちであり、その子供たちが大きくなって、故郷を思い、家族を思い、地域を思い、それから日本全国を思うという、そういう地に足が着いた生活をしてもらうための、自分を愛することから始まるということ、私どもが少しでも手助けになればという思いでいる。

- ・(越地委員) 事業収支を見て貴団体で非常に目立つのが、寄附金、協賛金が多いということ。これはどういうところからどんな形で集まってくるのか。

(団体) いままでは講師への支払、交通費、宿泊費、それから講演会記録の印刷費、その大半を寄附者から提供を受けてきた。しかしそれではいけないというところで、認定 NPO 法人を目指しているところもある。それで本基金による助成金の存在を知り、本年度開催した第 20 回講演に対して助成金の申請を行った次第だが、将来にわたって、高齢化に伴い、若い人が入ってきて、この会を知っていただくということが認定 NPO 法人の大きな目標であるため、この特定の寄附者というものを、少しでも多くの寄附者というところに置き換えられることが将来の大きな目標としている。

(越地委員) いまはどこかから大口の寄附をいただいているということか。

(団体) 大口でいただいている。

(UP-8) 特定非営利活動法人 教育支援プロジェクト・マスターズ熊本

【事業名】 地元の小中学校への教育活動支援事業

<質疑応答>

- ・(佐藤副委員長) 地域で小中学校の教育現場を支えていくということは非常に重要だと思うため、感銘した。この会員の方々は、教員の退職者の方だけなのか。あるいは、一般の方もちょっと研修すればできるような内容なのか。

(団体) やはりそのところは、誰も彼も入ってもらうというわけにはいかないが、いまの会員の中で教職の免許を持っている人、退職者はもちろん、退職して再任用に行きながらここにも来ているという先生方、それから児童員や読み聞かせボランティアにずっと入っている人など、この方は安心できるという方がほとんどになる。

- ・(越地委員) 対象となる子供は、具体的にどうやって集めるのか。

(団体) 最初に植木地区からコツコツと活動を広げて、10年経ってきているが、今年まで家庭教育地域リーダー養成講座等の委託を市から受けて、校内研究をさせていただいた。その中に候補となられるような、活動に参加したいといわれている方が熊本市、県下全区と各所にいらっしゃるので、この人たちを活用させるのには絶対もってこいの事業だと思っている。

(越地委員) 会員ではなく、対象となる子供たちをどうやって探しているのか。全員を教育するわけではなく、基本的には学校がやるわけで、隙間を見つけるということだが、どういう子供たちを呼んで活動をなさるのか。非常に難しいと思うが、チラシを配るなどといった感じなのか。

(団体) まずは校長先生から要望が入るので、それを聞く。だからアンテナは高くしておかなければいけないんだと思う。この頃多いのは、特別に支援を要する子供などで、1時間目から6時間目まで付き添わなくてはならない。そういうときに来て欲しいと言われ、1時間でも2時間でも付き添って、その子供の安全管理などしていく。

(越地委員) では、学校からいろいろと要望がくるのか。

(団体) そのとおり、学校に対応やニーズを聞いている。活動メンバーがあちこちにいるので、その地域の学校に聞きに行けば、ニーズはもうたくさんある。

・(松枝委員) この地道な活動で、成果として実感されていることはあるか。

(団体) まずは学校が喜ばれる。校長先生、教頭先生からありがとうございましたと言われ、その担任の教師などの喜びの声など、保護者活動もやっているが、そういう声はいっぱいあると思っている。

(UP-9) NPO 法人 熊本技術士の会

【事業名】 坪井川遊水地の減債対策に資する有効利活用事業

<質疑応答>

・(中島委員) 事業収支を見させていただき、すごく安い金額でこのような大きな事業ができるということで、素晴らしい事業だなと思っている。地元の方たちがボランティアで参加することで、このくらいの金額で実現できているというように思うが、昨年実施した効果についてお話を聞かせていただきたい。

(団体) これだけ行くと、専門の造園技師やトラックを運搬する作業員が要するため、その分は経費として計上させていただいているが、実はこの写真に写っている者は、ほとんど地元の人である。真ん中の一人に専門の者がいるが、ほとんどは地元の人であって、私たちも含めてボランティアで作業しており、技術士の会なので一定の実力はあるため、そういったものも理解し、手伝っていただきながらやっていくということで考えている。

・(佐藤副委員長) 昨年に続いての申請だが、そういう活動を熊本市内の他の場所にも展開していただきたいと思っている。貴団体には技術士の方がたくさんいらっしゃると思うが、団体としての今後の活動方向について、少し具体的に事例でお話いただければ。

(団体) ここの遊水地に関しては、図で言うと右下のピンクのところの一部であって、左側にはまだ広いゾーンがあり、そういったところに4校区あるため、その4校区に広く展開していきたいと考えて

いる。遊水地の会という会も作られているし、技術者集団として、当法人だけでなく、熊本県技術士会や日本技術士会の支部など全県下をもって、例えばバスツアーを年に一回企画したり、災害現場にお連れして現実の状況を見ていただくといった会もご用意している。そういった防災教育や防災のあり方など、現場を見ていただくよう協力している。

(佐藤副委員長) いまのところ坪井川に限ってやっていらっしゃるのか。

(団体) この事業は坪井川に限って実施しているが、当法人の活動は全県下広く考えてやっている。

- ・(古賀委員長) あわせて、他にやっていることがあれば、一つぐらい紹介していただけるか。

(団体) 具体的な予算をかけた事業は、毎年11月が「土木の日」なので、バスツアーで被災した場所だとか、緑川の昨年地震で壊れたところに行っていただき、実際の現場に降りて、工事現場の大変さや危ない状況を見ていただいたりもしている。これはNPO法人ではないが、県の団体や同種の団体でやっている。

- ・(古賀委員長) 一緒に草刈などをしているが、子供達の反応はいかがだったか。

(団体) 昨年9月に実施したとき、非常に喜んで、こういう広場ではつらつと元気に遊んでくれましたし、その冬になったら、地域の横でつくっておられるお芋を皆さんと一緒に食べたりと、この地域に対する思いがあって、非常にはつらつとしていただいているので、これを広めていきたいと思っている。また、4校区あってそれぞれ活動されているので、ご助力していきたいと思っている。

(UP-10) 熊本観光ボランティアガイド くまもとよかとこ案内人の会

【事業名】外国人観光客向けガイド語学研修

<質疑応答>

- ・(越地委員) 時間切れになってしまい、最後まで聞けなかったことが非常に残念だったので、早く補足して欲しい。

(団体) あと2点、我々が頑張っていること、熊本の間人が頑張っていること、それを地震の被害をきちんとお客様に正しく伝えるとともに、負けんばい熊本、蘇らせるぞ熊本城、その強い思いで活動している。

(越地委員) さらに外国人向けにスキルアップしようということだが、現在はどうスキルを磨いているのか。

(団体) それぞれ33名がSGGに登録しており、個人的にみんな勉強会をやっている。日本人の勉強の仕方は、どうしても教室があって、教科書があってという形で、そういう勉強には、休みのときにいろんな人がグループでやっているのだが、なかなかネイティブと話す機会がなく、自信がない。そういう

ことと、行幸橋の先に案内板がある。そこで我々は道案内をしており、ガイドではないので先程のデータには入れていないのだが、道案内を 17,481 人やっている。上に行くためにどうしたらいいのか、こうしたらいいと案内しているが、なんとそのうち 7 割近くが外国人なので、外国人と語学力を磨き、みんなですべて寄り合って勉強する。個人的に集まってはいるが、なかなかやっぱり、体系としてかたちづくってやらないといけない。

- ・(佐藤副委員長) 施設使用料が 18 万円と、結構かかっているが、これは国際交流会館の会議室使用料なのか。

(団体) そのとおり、使用料である。大体 2 時間で 3 千円相当で、ネイティブの先生達は、中国語だと実際に 2 時間 6 千円払っている。昨年 12 月に台湾から 2 回来ているが、30 人ぐらいで 2 回。中国語はネイティブの人の完璧な言葉を聞いておかないとわからないので、今回もし助成金をいただけるなら、すべてネイティブの先生の分と施設使用料に充てるつもりでいる。コピー代等は、我々の事業計画の中で出していく。

最後に、シニア世代ではあるが、これと機になんとか発展させていき、平成の熊本洋学校になりたいと思っている。

- ・(中島委員) パワフルなお言葉ありがとうございます。素晴らしい活動をされて、ボランティア団体として継続しているが、法人化については考えていらっしゃるか。

(団体) かつて NPO にしようとか、いろんな動きがあったが、元々当団体は退職したりタイヤ組や、女性だったら子育てが終わった人たちが集まっているので、活動時間がなかなか短く、そこで常に新人を補充しながらやっちはいるが、NPO にしていくといろんな問題がでてくるのではないかということが今後の課題になっている。しかしながら、昨年の地震の関係でそれどころじゃないという状況になり、9 月、10 月、11 月と案内が月平均 1 万人を超している状態にある。

(UP-11) 特定非営利活動法人 優里の会

【事業名】「里親制度の普及啓発と支援を強化するための事業」

- ・(古賀委員長) 平成 28 年度も当基金からの助成を受けられたが、この成果を踏まえて、平成 29 年度はどういった部分が変わったのかアピールポイントがあれば教えて欲しい。

(団体) まず区民祭りは、だんだんと回を重ねるごとにその要領がわかってきたと思うので、より里親制度に興味を示してもらえるよう工夫したい。パネルで示しても、なかなか一般の方がたくさん見られるところがないと難しいかと思うので、いかに気軽に見ていただいて、なるほどと思ってもらえるかという工夫を、例えばポケットティッシュを作って粗品を差し上げたり、そういったことでまずは来ていただいて、そこから内容を見ていただくような工夫ができているかと思っている。

- ・(越地委員) 熊本県里親協議会というものがあるが、そこでの役割の違い、あるいは補完関係、連携などを教えて欲しい。

(団体) 里親協議会は、里親さん同士で成り立っている互助組織というのか、そういった団体だが、いまは当団体とで協力関係を持って、例えばこの事業以外にも、里親さんの研修とか、あるいは里親さん同士の交流の場としてのサロンとかを当団体がさせていただいている。そういったときに協議会から呼び掛けていただいたりなどの連携をしている。また、事務局が協議会の予算の関係で持てないというおとで、いま暫定的にうちの事務局の方に置いているということもあって、日頃から連携しながら活動している状態にある。

- ・(古賀委員長) 例えば九州では、大分県がずいぶん頑張っているが、そういった意味では、熊本の場合は1割ぐらいに里親の割合が留まって要る。今回の事業は、啓発の取組ということだが、それ以外にその差に対しての目標や、それに達するための努力や手立てなど、お気づきのことはあるか。

(団体) 啓発が一番大きな原因かと思う。やっぱり「里親＝養子縁組をする」というイメージが強い。あるいは、ネットで検索すると「里親＝犬猫」になってしまう。だから世の中自体が里親という言葉のもつものをご存じないのかなということがあるので、まずは啓発が一番かと思っている。

大分県の場合は、児童相談所が中心になって、かなり委託を進めてきたという歴史というか、努力があるので、熊本としてはまだ今からというところであり、いま熊本は、児童相談所と支援機関の里親支援専門相談員さんというのがいらっやって、それから当法人が民間としてあるので、こういう関係機関がチームプレイでやっていくことが一番いいところじゃないかと思っている。まだ数字としての結果は出ていないが、これから期待できるんじゃないかと思っているところ。

(UP-12) NPO法人 身近な犯罪被害者を支援する会

【事業名】 犯罪被害者への理解と被害に遭われた方々への相談窓口の周知対策

- ・(佐藤副委員長) 社会的にも非常に意義の高い活動内容だと思って敬服している。一つお尋ねだが、この会の活動というのは全国的な組織が他にもあって、その一環として活動しているのか。それとも熊本独自のものなのか。

(団体) 熊本独自、私どもの独自の活動として、できるだけそういった普及活動尾に貢献したいということを実施している。

(佐藤副委員長) 他県には、こういう活動はないということか。

(団体) ないことはない。やっているところもあるし、一般にこれはやる必要があると考えている。

(佐藤副委員長) まだ全国組織にはなっていないということか。

(団体) 全国的にというか、それぞれの支援関係者の考え方によってやっているというのが現状。

- ・(古賀委員長) いまの質問に重なるが、こうした活動をするにあたり、警察や国、県の機関など、そうしたところとの連携はどういった状況なのか教えていただきたい。

(団体) 県も一体になって、被害者支援の枠組みとしていろんな対策を立てていらっしゃる。実際にはそれほど、被害者の実情についての話は、非常に少ない。今度で5回目になるが、最初は性被害に遭われた成人女性の方、その次はいじめにあった中学生、あるいは、殺人事件で大学生のお嬢さんを亡くされた方、今回は美容師の方が不慮にして殺人に遭われて亡くなられたということで、そういったいろんな被害者の実態を知る活動をいろいろとやっていかないと、支援する側にとっても、被害者がどういった思いをしているかそれぞれ違うので、そういった理解としても必要だと思っている。

- ・(越地委員) 事業の一つに相談窓口の周知徹底とあるが、仮に私が犯罪被害者関係でなにか相談するときは、具体的にどこにいけばいいのか。

(団体) お電話をいただければ結構かと。

(越地委員) どこにかけるといいのか。

(団体) 事務所が清水の方にあるが、その事務所に。

(越地委員) つまり、その辺りがまだ十分に認知されていないから、ということか。

(団体) そのとおりで、だから非常に、まずは窓口を知っていただくということも大事だし、被害者にとってはどういうところかということが相談までに一番考えるところなので、そういった告知、窓口の公開ということをしっかり示していきたい。

(越地委員) 事務所はどなたかの自宅なのか。

(団体) そうではなく、事務所を構えている。そこで面談もできるし、いろんな心理相談もできる。

- ・(古賀委員長) いまの質問に関してだが、そのチラシやパンフレットを役所に置いているだとか、現状ではどういった手立てをされているのか。

(団体) 現状では、各公民館だとか、そういったところに置かせていただいているが、非常に数が少ない。被害者支援についての話を聞いたあとは非常に真剣に考えていただくが、普通はさっと忘れてしまう。自分が被害に遭うということはまずないと思ってしまうので、そういうところから考えると、ある日突然起きるということを、やっぱりいま起きているということを知っていただいて、大事に置かせていただき、さらに携帯用のそういったグッズを作って渡していきたい。

(UP-13) 熊本ママさんブラスバンド ONE PEACE

【事業名】熊本ママさんブラスバンド ONE PEACE 第7回コンサート

- ・(越地委員) 今度が7回目ということで、これまでもコンサートをやってこられたようだが、経費の面を含めてどういったかたちで実現してきたのか。

(団体) 昨年と一昨年は助成金をいただき、コンサートホールでの活動を行ってきた。その前は、商業施設等でのコンサートというかたちで演奏活動を行ってきた。

- ・(古賀委員長) ブラスバンドだと中には高価な楽器もあるかと思うが、そういった楽器はどうやって調達しているのか。

(団体) 半分はサークル的な要素もあるので、楽器に関しては個人の持ち物というかたちになっている。団体で何か楽器を所有するというようなことは、ちょっと個人では持ちにくいような大きい楽器とか、あとは小さいパーカッションのような小物なんかは団体の方で管理している。

- ・(中島委員) ママさんブラスバンドということで、子どもさん連れの方が多いかと思うが、託児のこととか、小さい子がぐずるときはどのようにされているのか。

(団体) やっぱりご主人に手伝っていただかなくちゃいけない場面も多々あるが、昨年は助成金をいただいたおかげで、シルバー人材センターの方に依頼させていただいて、コンサートの時間は、普通の音楽のコンサートより大分短く、子どもの集中力が1時間くらいしか続きませんので、全体として3時間ぐらい育児の方をお願いした。

- ・(古賀委員長) 今回は、託児についてどのような予定をしているのか。

(団体) 今回は未定の部分が多いが、託児を頼む方が何人かいらっしゃるかということがあるし、あとはご主人のサポートがあれば、ほとんどのお子さんは客席でお母さんたちの活躍を見るようなかたちになるので、ちょっとその辺はまだ確定していない。

(古賀委員長) 最後に、これからこの活動をどういう風に広げていこうと、少し先のことを考えて、みんなですりょう風なことを考えているといったことがあったらご紹介いただきたい。

(団体) 毎年メンバーが数名増えており、昨年のコンサートでは他の団体との交流が叶った機会でもあったため、私たちの場合はブラスバンドだが、やっぱり同じように、フラダンスをされていたりだとか、合唱をされていたりだとか、そういうお母さん同士の交流の場を作れるようになったらいいなと、このコンサートをきっかけに考えている。

(UP-14) NPO法人 スポレク・エイト

【事業名】ロコトレ健康教室で健康長生き

- ・(佐藤副委員長) できれば、こういう市民が誰でも利用できるようなものを市全体に発展してもらいたいと思うが、今のところ西部地域に限っての活動ということで、今後の会の方針としてはどんなかたちでフォローなさるつもりでいるのか。

(団体) 当法人は、西区の8校区が集まった団体となっており、今は城山コミュニティセンターだけでの活動となっている。西区でも、先日お客様から「うちの近所ではないのか」というお問い合わせがあ

ったので、また人数を増やして会場を広げていきたいと思っている。市全体に広げていきたいと思っているが、同じNPO法人の総合型スポーツクラブがあるので、ゆくゆくはそちらと連携が取れていくようになったらいいのではないかと考えている。

- ・(古賀委員長) ロコトレ健康の「ロコトレ」とはどういった意味か。

(団体) ロコモーショントレーニングというものを短縮してロコトレになっている。

(古賀委員長) そういったものがきちんと確立しているということか。

(団体) そのとおり、検索していただいても「ロコトレ」で出てくる。

- ・(古賀委員長) 地域に体育協会があるが、それとは関係ないのか。

(団体) 関係ない。

- ・(田上委員) いままでもたくさんの活動をされてきたと思うが、今回事業計画書のなかで、事務費として結構たくさんの器具を購入されるようなので、これを美味しく活用して、どんどん活動を広げていかれたいということだと思う。人数としては1回13名の参加者で、年24回実施したいということだが、器具を購入することでこれだけの人数に対して活動ができるということなのか。昨年までは何人ぐらいやられていたのか。

(団体) 昨年は15人登録されているうち、平均して13人。今年はそれを増やして15人にしたい。本当はもっとどんどん増やしていきたいので、予算設定としてはこの人数にしているが、もちろんこちらとしては、増えることにはもう。

(田上委員) 反対に、物さえ増えれば、人数を増やしていくことは可能だということになるか。

(団体) それには交代制で、ある分に対応していきたいと思っている。

- ・(越地委員) これまでも日本体育協会とか、あるいはいろんな助成を受けてきておられて、これを独り立ちして展開していくという展望はあるのか。つまり、参加者を増やして、会費収入で運営費を賄い、あちこちの施設でいろんな教室があっているが、そういった展開が視野に入っているか。

(団体) この基金に申請するのは2年目だが、スタートアップ助成を受けたときにもレクリエーショングッズをいただき、子どもの方での分野でいろいろと活用したり、こちらのロコトレでも利用しているので、もし今後新しいレクリエーショングッズがまた買えることになったら、それをまたどんどん利用して、子どもの方にも還元して利用していけるように、広く使っていけるようにやっていきたいと思っている。おいおい助成をいただかなくても頑張って続けていける、いただいたものを利用して続けていけるようになっていきたいとは考えている。

(UP-15) NPO法人 でんでん虫の会

【事業名】地震で被災したひとり暮らしの孤立を防ぐ事業

- ・(井上委員) 一人暮らしの被災者の方の支援ということだが、そういった被災者の情報をどのように把握されるのか。

(団体) プレゼンテーションでも申したように、全国からいただいたお茶碗を被災者の方にお配りして、そのときに関係ができています。それから学園大学の学生さんたちも、いま一緒に被災地の方についている。そういうところで関係ができていの中で、一人暮らしの方がその中から掘り出せる。もちろんほかにもあると思うが、そういうところから思っている。

(井上委員) そういう情報は独自に収集されるのではなく、そういった関連から情報を得られるということか。

(団体) 私たちも他の団体からの情報も意識して、そういう面での情報共有をしている。

(井上委員) 仮設住宅だけでなく、みなし住宅にも入っていかれるのか。

(団体) みなしのところにも目が届かないところがあるんじゃないかと思っている。

- ・(佐藤副委員長) 2010年から活動されておられて、180人ぐらい賛助しておられるということで、今回は震災もあったので、支援が必要な一人暮らしの方は、非常に増えていると思う。それを当基金だけでやっていくというのは、寧ろもっと大きな市や県といった行政と一緒にするような手立てはないのかと思うが、その辺はなにか努力をされた結果なのか。

(団体) おっしゃるとおり、なかなか私たちの活動は、自分で言うのも変だが、一つの社会資本として大事な活動であって、それをどう維持していくのかということは大事なことだと思う。だから、この基金でお願いしている部分、他でカバーしていただかなきゃいけない部分、そういうのを私たちも切り分けながらやっていかないと、なかなか上手くいかない。特に人件費というところはできない。ボランティアで、年金生活でやっているが、これからの活動のためにも、事業負担の中身の意味でも、スタッフの養成が必要ということで、ほかの助成金を申請しながら、内容としては重ならないようにやっていきたいと思っている。

(佐藤副委員長) では、他にも活動資金が少しあるということか。

(団体) 別のところで、寄附金をいただいたり、善意銀行などに申請をしているところ。

- ・(越地委員) いままでの質疑に関連して一つ。被害者に対しては、いまは行政が物心両面で支援しようと力を入れているが、先程出たようにぜひ連携は取っていただかないと、せっかくの効果が薄くなる。すでにやっておられるとは思いますが、もう一つは予算面で、保管物資の管理に5千円×12ヶ月、一方で保管物資の管理者が5千円×12ヶ月とある。この管理者はどのようなものか。

(団体) いろんな物が搬入出されるので、それを野放しにすると、場所が混乱してくるので、こういうことを、必要とされているものをこの方に出していくということを管理していかなきゃなと思っていて、それが管理者という、わずかながらだが5千円でもお支払いして、責任を持っていただき、野放しになってしまうというのを防ぎたいと思っている。

- ・(古賀委員長) 質疑のなかに、熊本学園大学との連携や協力について出てきたが、会としてどういう位置づけとして考えているのか。今後広げていくときの大切な資源だと思うが。

(団体) そういった学識ある方やボランティアを目指す学生さんたちの力というのも大事にしていて、たとえば仮設住宅への訪問、とくにわかりにくいみなし仮設住宅の訪問、そういったところに、学園大学あるいは尚絅大学も近くにあるので、そういったところと連携しながらやっていきたいと思っている。特に学生は、学園大学だけでなく、地域にある福祉施設とも連携しながら、毎日地域包括センターや医療関係と、どんどん新規の方の電話が舞い込んでくるのだが、そういうところと一緒にシェアしていきたいと思っている。

6 総評 (市民公益活動支援基金運営委員会 古賀委員長)

総評として、3つお話しする。

まず、1つ目が申請状況。今回、スタートアップ助成が4団体、ステップアップ助成が15団体、合わせて19団体からの申請があったが、昨年から引き続き申請された団体が5団体あった。一方で、スタートアップ助成を含め、初めて申請したという団体もいくつかあり、そういった意味では、当基金の周知、広報によって、ある程度の裾野が広がってきたかなと喜んでいるところである。

2つ目に、申請事業それぞれの特徴を見ると、今回大きな特徴になったのは、個々の団体名は申し上げないが、例えば犯罪に関して、被害者の側に寄り添う団体、そして、刑余者の方たちの再生を支える団体。また、ひとり暮らしの貧困の問題、あるいは、里親制度といった活動があり、社会福祉という枠組みよりも、社会保障という大きな問題に取り組む団体が出てきたところかと思う。また、反面を言うと、昨年まで多かった地球温暖化だとかの環境問題がなくなったというのも、やはりそれなりの意味もあるのかなという風に思っているところである。

この市民公益活動というものは、法律や制度の隙間を私たち市民の知恵で、あるいは汗で、どういう風に埋めていくのかということが重要だとすれば、今回、先程申し上げた社会保障という大きな枠組みの中での活動で助成申請があったということは、これから5年、10年先の熊本市、あるいは周辺を含めた、市民公益活動の広がりに繋がっていくのかなと思っている。

3つ目に、やはり熊本地震に関わることを申し上げなければならない。熊本地震の結果のひとり暮らしだとか、あるいは、子どもたちのストレスといった新たな課題、こういったものに対応する活動が出てきたというのも、もうひとつの特徴であるかと思う。それ以上に、今回皆様方のプレゼンテーションを聞いて一番気になったのは、会場費がとても高くなっているということ。恐らく、これまでは中央公民館を利用してそれなりに安価だったのが、中央公民館が休館となり正当な金額で会場を借りとなったため、支出における会場費の比率が高くなったのかなと。そういった意味では、本当に熊本地震というものが身近な法人あるいは任意団体の活動のなかで制約になっていたんだなということを改めて感じたところである。

先程、運営委員として様々なご質問をさせていただいたが、それもそれぞれの団体がこれからどんどん大きく輪を広げていくためのひとつのアドバイスという意味で質問させていただいている。今回申請をいただいた

皆様にお礼を申し上げますと共に、これから運営委員会でしっかりと説明が出来るような議論で採択の検討を行うので、採択された団体におかれましては、新年度、それを生かして成果を出していただければと思う。

本日はどうもありがとうございました。

(終 了)